

## 幼児間で用いられる強い身体接触がもつ意味

渡邊 拓真\* 鈴木 裕子\*\*

\* 愛知教育大学大学院幼児教育領域

\*\* 幼児教育講座

### Implications of Strong and Close Body Contacts among Young Children

Takuma WATANABE\* and Yuko SUZUKI\*\*

\*Graduate student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Department of Early Childhood Education Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### Abstract

In kindergarten and nursery schools, strong and close body contacts, such as tapping, pushing, and hugging, are often made by young children when they interact with each other. In this study, we aimed to observe free-play scenes among 3-5-year-old children and to examine the implications of strong body contacts made by young children. The results showed that strong and close body contacts have the following implications: i. The child cannot express themselves in words, ii. It emphasizes the words uttered, iii. The child unilaterally vents their thoughts, iv. It supplements thoughts that cannot be expressed verbally, v. Anticipation of a reaction, vi. The child enjoys the action itself, vii. Combine the nori in synchrony with the other child, viii. Development of a shared worldview. Although acts of strong and close body contact may easily be interpreted as violence at the first glance, for young children, strong and close body contacts are a substitute for verbal communication, to express oneself and negotiate with others, suggesting that the body plays an important role as a substitute.

Keywords : 幼児, 強い身体接触, 相互行為,  
young children, strong and close body contacts, interaction

#### I 問題と目的

集団生活を営む保育の場では、幼児間のかかわりにおいて身体接触を用いる場面が散見される。幼児が日常的に用いる身体接触には、手を繋いだり、そっと抱きしめたりするなど、他者に対して優しく接触する行為がある一方、相手を叩く、引っ張るなど、他者に対して「強く」身体を用いて接触する行為が見られる。保育者が、幼児が他者を叩く場面を目撃した際、否定的な印象を受けることが予想される。しかし、実際の保育の場では、幼児が笑いながら相手を叩いたり、唐突に飛びかかったりすることによって、相手とかかわろうとする場面も見られる。そのため、他者に対する「強い身体接触」を、単純に好ましくなく推奨されにくい行為として決めつけるのではなく、幼児にとってどの

ような意味があるのかを解釈する必要があるだろう。

乳幼児の身体接触研究を俯瞰すると、アタッチメントやスキンシップといった、親子間の親密さを連想させるような研究<sup>1) 2)</sup>が多く見られる。それらの研究では、身体接触によって親子間に愛着関係が構築されるとして、身体接触の重要性が示されている。また幼児が身体を用いて他者と接触することでもたらされる価値については、これまでに塚崎ら<sup>3)</sup>や藤田<sup>4)</sup>の研究が見られ、幼児が他者との関係を構築したり展開したりするという意味が示されている。一方で幼児が他者を強く叩く、押すなどの行為は、身体接触のネガティブな一側面としてしか見なされず、研究の俎上に載ることはなく、身体接触がもつ意味は明らかにされていない。しかし、幼児間では他者を笑顔で叩くような強い身体接触は、必ずしも危険を危惧するのみの行為とは限らない。叩いた後も相手とのかかわりが

継続するなど、他者とかかわるための一方略として用いられていると捉えられる場面があり、他者とかかわりにおいて何らかの役割をもつと考えられる。

そこで本研究では、幼児間で用いられる強い身体接触の実態を捉え、他者とかかわりにおける強い身体接触のもつ意味を明らかにすることを目的とする。

なお身体接触は、乳幼児期から存在するコミュニケーションの一つ<sup>5)</sup>であり、その機能は、行為者の意図を受け手に伝える「伝達」だけでなく、相手と「共有」することにより互いに影響しあう相互行為であると捉えられている。そこで本研究では、強い身体接触を「他児に対して身体接触そのものを用いてかかわろうとする意識がみられる相互行為であり、その中でも、力量が強く表れている行為」と定義する。

## II 研究方法

### II.1. 本研究における研究手法

本研究では質的研究法をもとに、一部に量的な研究方法を用いた分析を合わせて検討する。

#### 観察対象園と観察法の設定

対象児は、筆者が2020年3月まで勤務していた私立幼稚園に在籍する幼児である。

#### 対象児の設定

愛知県内私立幼稚園に在籍する幼児96名を観察の対象児として設定した。3歳児31名（男児：14名、女児17名）、4歳児31名（男児14名、女児17名）、5歳児34名（男児20名、女児14名）であった。

#### 観察期間と手続き

2019年6月24日～2020年2月28日の期間、各年齢29日間の観察を行った。総撮影時間は2625分であった。登降園の時間帯を含めた自由活動中に、定点ビデオカメラによる撮影を実施し、その後独自に作成した分析シート（表-1）をもとに逐語化した。

#### 観察期間の区分

当該園の保育計画と子どもの発達段階を踏まえ、全観察期間のうち、6月から夏季休暇前までの7月を第1期（観察日数：各年齢8日間、観察時間：815分）、9月から12月の生活発表会前までを第2期（観察日数：各年齢12日間、観察時間：1000分）、12月の生活発表会後から2月までを第3期（観察日数：各年齢9日間、観察時間：810分）として全3期に区分した。

### II.2. 幼児間の相互行為場面を強い身体接触として捉える

観点とそれを描き出すための分析シートの作成

幼児が用いた行為が「強い身体接触」であると断定し解釈する際、恣意的な判断を避けるため、強い身体接触における「強い」と「行為者と受け手の双方に何らかの影響を及ぼしたかかわり」を同定するための観点と水準を設定し、各事例別に分析シート（表-1）

表-1 分析シートの観点と水準

身体接触に関する情報	内容（観点と水準）	記入例	
【時間】	身体接触が発現した時間	8:45	
【行為者→受け手】	身体接触の行為者とその受け手	BW子→BG男	
【直前の事象】	身体接触が発現する直前の行為者と受け手の様子	BW子がBG男の頬を掴むと、BG男が移動する	
【行為の概要】	行為者が用いた身体接触の概要	抱きつく	
【接触部位】	身体接触によって接触した行為者と受け手の身体部位 (行為者の身体部位→受け手の身体部位)	上半身→腰	
行為者	【表情】	身体接触が発現した際の行為者の表情 (笑顔/微笑/真顔/不満・しかめ面/怒り)	笑顔
	【発声】	身体接触が発現した際に伴われた発声 (発声した言葉を表記/無)	「よっこいしょ」
	【受け手との向き】	身体接触が発現した際の行為者と受け手の向き (正面/側面/背面)	背面
	【接触の強さ】	身体接触の物理的な強さ (1/2/3 *弱1→強3)	3
	【興奮の強さ】	身体接触が発現した際の興奮の強さ (1/2/3 *弱1→強3)	3
受け手	【反応】	身体接触を受けた際の反応 (拒む/拒まない *概要を表記)	拒まない (這って移動を続ける)
	【表情】	身体接触を受けた際の表情	微笑
【かかわりの頻度】	行為者と受け手の日常的なかかわりの頻度 (1/2/3 *少1→多3)	2	

を用いて判断することとした。分析シートを用いて事例を記述することで、事例を細分化して捉えることが可能となり、また各シートを見比べることで、1つずつの強い身体接触を比較検討することが容易となり、発達的な変化を追うことも可能となった。

## III 結果と考察

### III.1. 強い身体接触の発現頻度

#### III.1.1. 年齢別にみた強い身体接触の発現頻度

全観察期間のうち「強い身体接触」と捉えられた事例は、3歳児49事例、4歳児82事例、5歳児90事例の全221事例であり、接触数は3歳児57回、4歳児93回、5歳児102回の全252回であった。

強い身体接触の発現頻度について、3歳児、4歳児、5歳児の年齢別に $\chi^2$ 検定を行った結果、年齢に有意差が認められた( $\chi^2_{(2)}=13.5$ ,  $p<.05$ )。その後の残差分析の結果、3歳児で発現した強い身体接触は有意に少なく、5歳児は有意に多く発現したことが明らかとなった。

#### III.1.2. 強い身体接触の行為者となった人数と割合

各年齢の男女のうち、強い身体接触の行為者となった人数と割合を表-2に記した。4歳児と5歳児では、在籍する男児のほとんどが強い身体接触の行為者であった。

#### III.1.3. 強い身体接触における行為者の性別発現頻度

強い身体接触の発現頻度を、行為者の年齢別、性別に記すと、表-3の通りであった。

全年齢において、実側値（回数と割合）を比較した場合、女児よりも男児の方が強い身体接触の発現頻度が高く、3歳児のみ男児と女児の差が他の年齢よりも小さい結果となった。行為者の年齢(3)×性別(2)の $\chi^2$ 検定を行った結果、年齢別の性別比較に関して有意差が

表-2 強い身体接触の行為者となった人数とその割合

	男 児	女 児
	行為者／在籍 (数) 割合 (%)	行為者／在籍 (数) 割合 (%)
3 歳児	9/14 (64.3)	10/17 (58.8)
4 歳児	12/14 (85.7)	9/17 (52.9)
5 歳児	20/20 (100)	6/14 (42.9)

表-3 強い身体接触における行為者の性別にみた発現頻度 (割合)

	男 児	女 児	合計
	頻度 (回) 割合 (%)	頻度 (回) 割合 (%)	
3 歳児	37 (64.9)	20 (35.1)	57
4 歳児	69 (74.2)	24 (25.8)	93
5 歳児	83 (81.4)	19 (18.6)	102

認められた ( $\chi^2_{(2)} = 6.99, p < .05$ )。その後の残差分析の結果、3歳児男児と5歳児女児が行為者となった強い身体接触は有意に少なく、3歳児女児と5歳児男児が行為者となった強い身体接触が有意に多いことが示された。

III.1.4. 強い身体接触における行為者と受け手の関係  
強い身体接触の発現頻度について、行為者と受け手(被行為者)の関係を性別、年齢別に示した(表-4)。

表-4 強い身体接触における行為者と受け手の関係

	男→男	男→女	女→男	女→女
	頻度(回) 割合 (%)	頻度(回) 割合 (%)	頻度(回) 割合 (%)	頻度(回) 割合 (%)
3 歳児	25 (43.9)	12 (21.1)	7 (12.3)	13 (22.8)
4 歳児	66 (71.0)	3 (3.2)	20 (21.5)	4 (4.3)
5 歳児	76 (74.5)	7 (6.9)	15 (14.7)	4 (3.9)

行為者と受け手の関係 (4) × 年齢 (3) の  $\chi^2$  検定の結果、有意差が認められた ( $\chi^2_{(6)} = 42.46, p < .05$ )。その後の残差分析の結果、男児から男児に対して用いられた強い身体接触の発現頻度は、4、5歳児に有意に多く、3歳児に有意に少ないことが示された。男児から女児に対して用いられた強い身体接触においては、3歳児に有意に多く、4歳児に有意に少ないことが示された。また女児から女児に対して用いられた強い身体接触においては、3歳児に有意に多く、4、5歳児に有意に少ないことが示された。各年齢の割合を比較しても、4、5歳児においては男児から男児への強い身体接触が70%以上となり、3歳児では43.9%と4、5歳児と比べて低い割合であった。全年齢において男児から男児に対して用いられた強い身体接触が高い割合を占めた。

強い身体接触のように、一見すると推奨されないような行為である「からかい」を研究した牧<sup>6) 7) 8)</sup> は、冗

談で悪口を言う、遊び半分で叩く、ふざけて意地悪をするなど、相手が怒ったり嫌がったりする言動を用いて他者と関わろうとする行為を「からかい」と呼び、幼児が用いるからかいが、コミュニケーションの手段として用いられることを明らかにしている。その研究の中で観察されたからかいのエピソード(4歳児クラス)は、ほとんどの男児において見られ、基本的には同性に対して行われやすいと述べている。この結果は、本研究における4歳児の行為者と受け手の性別に関して、ほとんどの男児に発現し、また男児から男児に対して多く用いられるという結果が示されたことと一致している。

### III.2. 幼児間における強い身体接触がもつ意味の分類

強い身体接触を用いた幼児間のかかわりとして抽出された事例をもとに、幼児間における強い身体接触がもつ意味を考察した。行為者がどのような意味でその行為に及んだのかという観点から、分析シートを用いて考察した結果、「幼児間における強い身体接触がもつ意味」が8つに分類命名された(表-5)。

事例分類の一致度に関しては、幼稚園教諭1名(保育歴9年)に分類の意味を説明し、事例ビデオの視聴をもとに判定を依頼した。その結果、252接触のうち11接触が筆頭筆者との不一致となり96%一致した。不一致の接触は、筆頭筆者との合議の上決定した。

また、分類された強い身体接触を用いる意味(8) × 年齢(3) の  $\chi^2$  検定を行った結果、有意差が認められた ( $\chi^2_{(14)} = 37.90, p < .01$ )。その後の残差分析の結果、【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味で用いられた強い身体接触が有意に3歳児に多く、同じく【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味で用いられた強い身体接触が5歳児に少ないことが示された。また3歳児では【vii 同調してノリを合わせる】意味で用いられた強い身体接触が4・5歳児より有意に少なく、5歳児では【iv 言葉では表現しきれない考えを補う】意味で用いられた強い身体接触が3・4歳児より有意に多いことが示された。この結果を踏まえて、強い身体接触を用いる8つの意味についての命名の経緯について事例と分析シートから考察する。なお、全ての事例において、分析シートを用いて分析しているが、紙幅の都合上、【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつ強い身体接触のみ「分析シート」と、「強い身体接触として抽出された根拠」を記載する。

#### III.2.1. 【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】

##### 事例 A-8 「わたしの場所」

3歳児 2019.7.1 場面：自由遊び

壁面に展示した作品の中に、自分たちが描いたアイスクリームの製作物が飾り付けられていることに数人の幼児らが近付くと、保育者は幼児らに「この中に先生

表一五 幼児間における強い身体接触がもつ意味の分類と年齢別・時期別にみた接触の発現数と割合

強い身体接触がもつ意味	年齢別・時期別に見た接触の発現数(回) 各期の発現数/各年齢の発現数の割合(%)												
	3歳児				4歳児				5歳児				計
	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	
i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる	6 (35.3)	9 (52.9)	2 (11.7)	17	1 (14.3)	6 (85.7)	0 (0)	7	3 (50)	3 (50)	0 (0)	6	30
ii 発した言葉を強調する	3 (60)	1 (20)	1 (20)	5	0 (0)	2 (50)	2 (50)	4	0 (0)	3 (75)	1 (25)	4	13
iii 自分の思いを一方向的に発散する	1 (50)	0 (0)	1 (50)	2	1 (100)	0 (0)	0 (0)	1	2 (66.7)	1 (33.3)	0 (0)	3	6
iv 言葉では表現しきれない考えを補う	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0	0 (0)	2 (40)	3 (60)	5	5
v 反応を期待して仕掛ける	4 (25)	6 (37.5)	6 (37.5)	16	10 (37.1)	5 (18.5)	12 (44.4)	27	10 (30.3)	13 (39.4)	10 (30.3)	33	76
vi 行為自体を楽しむ	1 (12.5)	3 (37.5)	4 (50)	8	8 (34.8)	6 (26.1)	9 (39.1)	23	3 (17.6)	8 (47.1)	6 (35.3)	17	48
vii 同調してノリを合わせる	0 (0)	0 (0)	7 (100)	7	6 (25)	7 (29.2)	11 (45.8)	24	11 (40.8)	9 (33.3)	7 (25.9)	27	58
viii 共有した世界観が発展する	1 (50)	0 (0)	1 (50)	2	2 (28.6)	1 (14.3)	4 (57.1)	7	4 (57.1)	0 (0)	3 (42.9)	7	16
計	16 (28.1)	19 (33.3)	22 (38.6)	57	28 (30.1)	27 (29)	38 (40.9)	93	33 (32.4)	39 (38.2)	30 (29.4)	102	252

\*1期(6-7月)8日間 各年齢815分 2期(9-12月前半)12日間 各年齢1000分 3期(12月後半-2月)9日間 各年齢810分

の(作った)アイスが一個ある」と伝える。すると数人の幼児が壁面に近寄ってくる。その中の一人であったAF子が壁面を見上げていると、保育者の製作物を見つけた様子のAE子が壁面に近づき、AF子の背中に接触した。すると①AF子は不満な表情をして、さらに壁面に近づこうとしているAE子に対して、背中で押す。その行為を受けたAE子も抵抗するように押し返す。

強い身体接触として抽出された根拠

AF子は行為に至る直前、保育者の「この中に先生のアイスが一個ある」という声掛けに誘われるように壁面の前にやってきて、展示物の中から保育者の製作物を探し出そうとしている。その最中に、保育者の製作物を見つけた様子のAE子が壁面に近づき、AF子と接触するに至った。AE子はAF子を退けようとして身体接触到に及んでいるのではなく、保育者の製作物を発見し、近くで見ると近づく際に回りを気にしなかったため、偶然触れてしまったものと捉えられる。下線部①の行為は【接触部位】と【行為の概要】から、AE子の接触に対してAF子は背中で押すという行為であったことがわかる。その際の【接触の強さ】【興奮の強さ】はともに3を示しており、どちらもとても強い状態であったことが捉えられたため、下線部①の行為を強い身体接触として解釈した。考察

AF子は、壁面の前で保育者の作成した製作物を探していた。その最中にAE子も壁面を見るために近づいており、偶然AF子と身体が接触している。その際、AF子は自分の場所をAE子に奪われると感じたのだろう。言葉なく2人の身体が接触したことにより、AF子はAE子の行為を自分がいる場所への侵入を感じたと解釈された。瞬間的に自分の場所を守ろうとして湧き上がった感情は、突発的にAE子を押すという攻撃的な行為に現れている。このような物や場所を占有しよ

事例 A-8 「わたしの場所」の分析シート

【時間】	①9:25	
【行為者→受け手】	AF子→AE子	
【直前の事象】	展示物の中から保育者の製作物を探す	
【行為の概要】	押す	
【接触部位】	背中→上半身	
行為者	【表情】	不満
	【発声】	無
	【受け手との向き】	背面
	【接触の強さ】*1	3
	【興奮の強さ】*1	3
受け手	【反応】	拒む (押し返す)
	【表情】	真顔
【かかわりの頻度】*2		3

\*1 接触・興奮の強さ(弱1→3強)

\*2 行為者と受け手の日常的なかかわりの頻度(少1→3多)

うとするいざごは幼児間の特に3歳児において散見されるものであり<sup>9)10)</sup>、本事例のように情動の発露と同時に強い身体接触として発現する場面が捉えられている。

下線部①の行為は言葉を発しておらず、強い身体接触のみを用いて相手とかかわっており、「ここは私の場所だよ」「こっちにこないで」という思いを、言葉ではなく身体を用いて伝えようとしているといえる。

【i言葉にならない・言葉ではうまく表現しきれない思いが溢れる】意味をもつ強い身体接触の特徴は、感情が溢れ出すようにして突発的に発現する点である。この意味をもつ強い身体接触は、思い通りにならない場面や、不快感を覚えるなどして感情が急激に高揚し、その感情と連動するように突発的に身体が動いて行為に及んでいることが特徴である。“身体を用いて思いを伝えよう”という意図的な行為として強い身体接触を用いているのではなく、湧き上がった思いが強い身体接触として表出しているといえる。

### Ⅲ.2.2. 【ii 発した言葉を強調する】

事例B-53 「くすぐり合い」

4歳児 2019.12.17 場面：一斉活動前

一斉活動が始まるまでの時間、BN男、BL男、BY子の3人は、くすぐり合いをしている。それぞれが楽しそうに笑い合いながらくすぐり合っていると、その様子に気づいたBF子がやってきて、同様にくすぐり合いに参加する。BF子も加わったことで、次第にくすぐり合いに参加している幼児らの興奮が高まっていく様子が見られる。そんな中、BN男がBY子の首元をくすぐった際にBY子が「やめて、やめて」と言って抵抗する。するとそのBY子の言葉を聞いていた①BF子が、BN男の胸を強く押してBY子から引き離し、「やめてって言うてるでしょ」と語気を荒げる。

考察

下線部①の行為が発現する直前、BN男がBY子に対してくすぐり行為を行っていた。BF子は、BY子がくすぐられていることを嫌がる様子を見たことにより、その行為を辞めさせるためにBN男に対して強い身体接触を用いている。BF子は、BY子が「やめて、やめて」と嫌がる様子を見たことにより、行為を止めようとし、BN男に対して「やめてって言うてるでしょ」と語気を荒げている。その際に手で相手の胸を押すという強い身体接触を用いたことは、【ii 発した言葉を強調する】ためであると解釈できる。

ひとが他者に思いを伝える際には言葉を軸として用いるが、言葉だけで相手に伝えられる情報は、全情報のうち35%程度にすぎず、65%は非言語コミュニケーションによって伝達されるとされている<sup>11)</sup>。また相手に対して直接接触れることによって、行為者の思いが誰に向けられているのか、つまり対象者が明確になることや、受け手の注意を行為者に向けられることができる点も、思いを伝える際に強い身体接触を用いる有効性と考えられる。そのため、言葉を使って思いや考えを伝える際に、その言葉を強調して確実に受け手に伝えるために強い身体接触を用いているといえる。

### Ⅲ.2.3. 【iii 自分の思いを一方向的に発散する】

事例C-34 「がしーん」

5歳児 2019.9.5 場面：片付け後

自由遊びの時間が終了し、CH男は一人で保育室内を走っている。すると①CH男は、自分の走る先を自分の方へ向かって歩いているCM男に対して、通り過ぎる際に「がしーん」と言いながら、CM男の腹部を叩く。CM男は横目でCH男を確認するが、気に留める様子はない。CH男もCM男の反応を気にするわけでもなく、そのまま走りつづける。

考察

上記事例以前には、CH男とCM男のかかわりは目

撃されておらず、下線部①の強い身体接触は唐突に行われた。CH男はCM男に対して一方的に接触し、すぐにその場を立ち去っている。下線部①で「がしーん」という言葉を発していることから、偶然に接触したのではなく意図的に身体接触を用いていることがわかる。しかし、すぐに走り去っていることや、行為時やその後に受け手の反応を気にするような様子はみられないため、CH男がCM男とのかかわりを期待して接触したのではないと推察できる。強く身体を接触させることによって【iii 自分の思いを一方向的に発散する】こと自体が行為の目的であり、受け手の反応には大して期待していないように捉えられるため、強い身体接触がもつ意味について、接触と運動の側面から考える。

強い身体接触において用いられる「叩く」行為に注目したとき、叩くことによって得られる効果には次のことが挙げられる。飯田・石川・菊本・クニッシュ<sup>12)</sup>は「ドラムサークル」という打楽器を用いて集団で即興的にリズムアンサンブルを楽しむ活動を小学校等の授業に取り入れることで得られる効果として、ドラムを叩くことによってストレスが発散される効果がみられるとしている。また足立・杉山・神原・萩田<sup>13)</sup>は、情動行動の表出を促すことを目的とした研究において、ロボットを叩く実験によってインタラクションを持続させるための要因を調査し、その結果、叩くことを楽しいと感じる要因を、体を動かすことに起因する楽しさと、インタラクションに起因する楽しさの2つであると述べている。これらは対人接触について述べたものではないが、叩くという接触行為によりストレスが解消されたり、楽しさを感じたりするなど、叩くという行為のもつ効果が示されている。

運動のもつ効果に着目すると、不安やストレスなどのネガティブな感情を減少させることが先行研究から示されており<sup>14) 15)</sup>、望月<sup>16)</sup>や小田<sup>17)</sup>も「体ほぐし運動」という他者との身体接触を伴う運動において、他者の身体に触れることで、自分の身体に気づくと述べている。このように運動としての身体接触には、ネガティブな感情を減少させたり、自分自身の身体に気づく機会になったりするなどの効果がある。

これらのことから、他者に対して自分の思いを一方向的に発散する行為は、行為者が親密性を感じている相手に対して一方的に身体を用いてかかわることで、自分の気分を落ち着かせる、触れることで身体感覚を得る、一定の満足を得るなどの効果があると考えられる。

### Ⅲ.2.4. 【iv 言葉では表現しきれない考えを補う】

事例C-81 「あほ」

5歳児 2020.2.21 場面：絵画製作

CS男は画用紙とクレヨンを持ち、絵画製作をするために床に座る。CS男が絵画製作に取り掛かると、CT男が近くにやってくる。CT男はCS男の絵を見る

と微笑を浮かべ、大きな声で周囲に向かって「見てーこれ」と言う。CS男はその発言に対して、微笑を浮かべながらそれ以上の発言を遮るようにして、CT男にぐっと詰め寄る。CT男がその場を離れていったため、CS男は絵画製作の続きに戻る。するとCT男が再び近づいてきて、からかうように「ねえ、見てあれ、この人誰」と言ってCS男の描いた人物を指差す。するとCS男は、すこし間をおいてからCT男の頭を加減して軽く叩く。CT男は叩かれた際に一瞬身をかめたが、その後は微笑を浮かべながらその場を立ち去る。そのような2人のかかわりを隣で見ていたCU男は、CS男の描いた絵について質問をする。CS男の返答を聞いたCU男とCM男は「えー」と声をあげて大袈裟に転んでみせる。①CS男は2人の行動によって真顔になり手を振り上げるが、一呼吸置くと微笑を浮かべて「あほ」と言いながらCU男の胸を叩く。その後、CS男とCU男は2人で笑顔を見せて会話をしながら、CS男は絵画製作を続ける。

#### 考察

下線部①の強い身体接触が発現する以前、CS男は自身の製作している絵画について、CT男から「見てーこれ」などとからかわれるような指摘を受けていた。そのため製作中の絵画について評価、批判されるような行為に対して、抵抗感をもっていと推察される。しかしCS男が、CU男とCM男に対して自分の絵画について説明をした際、CU男らは「えー」と声をあげて大袈裟に転んでみせた。このCU男らの行為は、先にCT男が用いた行為に類似したふざけ行為であると推察されるが、CS男はその行為を好意的なものとして受け取ることができなかつたと思われる。むしろ、そのようにふざけたりからかったりするような行為を望んでいなかったのだろう。それはCS男が、CU男らの行為に対して、真顔で手を振り上げている様子からも読み取れる。しかし、CS男は振り上げた手をそのままCU男に叩きつけることはなく、力を加減して叩いている。加えて表情にも微笑を伴わせていることから、CS男が自分の感情を抑制して行為に及んでいることがわかる。また微笑を浮かべて行為に及ぶことによって遊戯性を伴わせ、CU男に対して敵意をもって用いる行為ではないことを表していると読み取れる。CS男は自分に湧き上がった感情をそのままぶつけるのではなく、CU男との関係性を考慮して、感情を抑制したり、力や表情を調節したりしながら強い身体接触を用いたと推察できる。そのため、絵画製作に対して指摘することをやめてほしいという考えをCU男らに理解してもらうために、言葉を用いてCU男らの行為を否定するのではなく、強い身体接触を用いて伝えようとしていると考えられる。「あほ」という言葉に加えて力を加減して叩くことで、CU男らの行為自体は否定しながら、

微笑を浮かべて遊戯性を伴わせ、関係性を壊すことなく自分の考えを理解してもらおうとしたと捉えられる。

自分の思いを伝える際【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつ強い身体接触は、言葉では表現しきれない思いから突発的に身体を用いる行為であった。その行為は、結果的に身体を用いて表現するに至ったものであり、受け手の心情や受け手との関係を考慮することなく相手とかかわるものであった。しかし5歳児で発現した【iv 言葉では表現しきれない考えを補う】意味をもつと捉えられた強い身体接触は、言葉で表現しきれない考えを伝えようとする際、それを補うように、受け手に対して意図的に身体を用いてかかわる行為であった

池田<sup>18)</sup>が幼児期の感情表出の調整の発達において「4歳頃から抑制制御が発達していくことや、6歳頃から表情を意図的にコントロールできるようになっていくことに支えられ、意図的に様々な動機に基づいて表出を調整できるようになっていくのだろう」と述べており、これは本研究において抽出された、強い身体接触がもつ意味の発現数にも現れている。本研究では、3歳児において【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつと捉えられた強い身体接触が多く抽出され、4、5歳児では発現する割合が減少していた。この結果は、4歳頃から感情表出の抑制制御が発達することと関係があると考えられる。

また5歳児になると感情的に行為に及ぶのではなく、言葉では表せないまでも意図的に強い身体接触を用いるようになる要因は、感情表出の抑制だけでなく「考える力」、すなわち論理的思考力が発達するためであると考えられる。内田・津金<sup>19)</sup>も、乳幼児の論理的思考の発達に関する研究の中で、5歳児は幼児期なりの論理的思考力が質的に高まると述べている。

このように、強い身体接触という受け手に直接身体を接触させてかかわる行為において、5歳児になると感情のままに相手に接触するのではなく、自分の目的のために十分に思考しながらかかわることができるようになるといえる。

#### Ⅲ.2.5. 【v 反応を期待して仕掛ける】

##### 事例B-18 「パイナップルのおもちゃ」

4歳児 2019.7.1 場面：片付け

片付けの時間、BB男は保育室内を1人でうろうろと歩いている。床に落ちていたパイナップルのおもちゃを見つけると、BB男はそれを自分の額に押し当てて張り付け、その姿を近くにあったBD男に披露する。BB男の行為に対してBD男は一瞬笑顔を見せるが、BB男から離れる。その後①BB男はBC男を見つけて近づくと、何も言わずにBC男の肩を掴み、パイナップルのおもちゃが張り付いた自分の額をBB男の額に押し当てる。BC男はBB男の額からパイナップルのおもちゃを取ると、自分の額に張り付けてBB男に笑いかける。

考察

BB男は片付けを意欲的に行うわけではなく、片付けを退屈に感じている様子で保育室内をうろうろとしていた。その最中、パイナップルのおもちゃを拾っている。幼児らの間では、額にパイナップルのおもちゃを張り付けてふざける行為はよく用いられ、その姿を面白がる幼児の様子が捉えられており、この行為は遊戯性を伴うものと解釈できた。BB男は、額にパイナップルのおもちゃを付けた姿を誰かに見せることで、相手とおかしな姿を笑い合い、退屈な片付けの時間を楽しみを見出そうとしていたのではないかと推察される。しかしBB男がパイナップルのおもちゃを額につけた姿を見せた際、BD男はその場を立ち去っている。BB男にとって、BD男の反応は満足できるものではなかったのだろう。そのため自分の行為に対して反応してくれる相手を求めて、BC男にかかわったと思われる。BC男に対しては、先程と同様にパイナップルのおもちゃを額に張り付けた姿を見せるだけではなく、下線部①の強い身体接触を用いることによって、BC男の反応を確実に得ようとしている姿が捉えられている。肩を掴むことにより、BC男の注意が自分に向くようにするとともに、額を押し当てることで、受け手の反応を期待して仕掛けていると読み取ることができる。

松井・無藤・門山<sup>20)</sup>は、遊び集団が出来上がっていない状態においては、暗黙の方略が仲間間の相互作用のきっかけになることを述べており、牧<sup>21) 22)</sup>も、からかいにおける役割のひとつに「ちょっかい」をあげ、からかいが相手の注意を引き付けるための手段であるとしている。また牧は、「からかいは、遊ぶ意志の確認、遊びへの参加態度の表明、遊び開始・再開のきっかけ、新たな楽しさ・おかしさの提示といったように、遊びの展開と深くかかわっている」とも述べている。下線部①の強い身体接触は、肩を掴みながら額に付けたパイナップルのおもちゃを受け手の額に押し当てる行為であり、その反応から、受け手の遊びの意思を確認していると捉えられる。同時にこの行為は、BB男がBC男とのかかわり開始のきっかけや、ふざけ行為としてのおかしさの提示でもあると捉えられるため、強い身体接触は、からかいと同様に遊びの展開とかわる行為であるといえる。

これらが指摘しているように、ふざけや挑発行為を伴いながら相手の反応を期待して仕掛けることで相手とのかかわりのきっかけをつくろうとして、強い身体接触を用いているといえる。

Ⅲ.2.6. 【vi 行為自体を楽しむ】

事例A-40 「にらめっこ」

3歳児 2020.2.5 場面：自由遊び

AM子、AE子らとともに絵本を読んでいたAA子は、絵本を片付けるとAM子に対しておかしな顔をして見

せ、にらめっこが始まる。AM子がにらめっこに応じるようにおかしな顔を見せると、AA子はAM子に対して正面から両手と額を合わせて接触し、押し合いとなる。しばらくAM子との押し合いを楽しんだ①AA子は、近くでその様子を見ていたAE子に対しても同様に手を合わせ、おかしな顔をしながら両手で押す。対するAE子もおかしな顔をして押し返すことで押し合いとなる。

考察

AA子はAM子とにらめっこをしながら押し合う行為を楽しんでおり、下線部①ではその行為をAE子に対象を変えることで同様に楽しもうとしていると捉えられている。その際のAA子の表情が、AM子に対するものと同じくおかしな顔であった点も、同様の行為であることを示すものである。そのため、AA子はAE子に対して【vi 行為自体を楽しむ】意味として強い身体接触を用いたものとして解釈した。

身体を接触させること自体を楽しむ行為は、母子間で行われるくすぐり遊び<sup>23)</sup>を典型として、乳児期から行われており、くすぐり遊びは双方向的なかかわり合いの行為として、両者にとって価値のある行為であることが示されている。保育現場においても、強い身体接触を用いて受け手と身体を接触させて遊ぶこと自体を楽しむ行為が、意図的に用いられている。また幼児と大人の間においても、押す、引っ張るなど身体を接触させる行為を用いて遊ぶ「じゃれつき遊び」による発達の効果が提唱されている。正木ら<sup>24)</sup>によると、じゃれつき遊びによって前頭葉の機能を高め、幼児の発達に寄与することが示されている。千葉<sup>25)</sup>も、じゃれつき遊びを行ったことによる幼児の変化として、「社会性」「集中力」「末端の発達」「事故の報告の減少」「遊びの変化」「全身を使った体の動き」の6つをあげていることから、じゃれつき遊びを行うことによる発達の効果が示されている。これらの研究は大人対幼児を対象として観察されたものであるが、幼児が集団生活を営む保育現場では、幼児対幼児の関係においても日常的に身体を用いてかかわり合う場面が見られ、強い身体接触を用いること自体を楽しむ行為にも、同様の効果が期待できると考える。

Ⅲ.2.7. 【vii 同調してノリを合わせる】

事例C-25 「もみもみ」

5歳児 2019.7.2 場面：一斉活動前

一斉活動の開始を座って待っているCX男に対し、CI子は微笑を浮かべて背後から近づくと唐突に「もみもみもみ……」と言って肩を強く掴み出す。行為を受けたCX男は、肩をすくませて笑う。するとCI子は先程と同様に、CX男の近くに座っていたCP男とCH子に対して背後から肩を強く掴み、順にくすぐっていく。くすぐられたCP男、CH子はともに笑顔である。そのようなCI子たちのかかわりを少し離れた位置か

ら見ていた①CA男は、CI子の背後からそっと近づき、CI子の肩を強く掴む。CI子は驚いたようすで身体を翻してCA男の手を振りほどくと、微笑を浮かべる。

#### 考察

下線部①は、CI子が用いた肩を強く掴む行為がCX男、CP男、CH子に受け入れられている様子を目撃したことにより、その場に強い身体接触を用いたかわりが許容される雰囲気を感じて用いられたと推察できる。そこでCA男は、CI子が用いた行為を真似することによって、その場の雰囲気に同調しながら下線部①のように強い身体接触を用いたものと捉えられる。肩を強く掴むという強い身体接触が受け入れられている場面に【vii 同調してノリを合わせる】ように、CA男も同様の行為を用いることでCI子らのかかわりに参加しようとしたものと解釈することができる。

このように、幼児間では相手とノリを合わせるようにして強い身体接触を用いる姿が捉えられるが、鈴木<sup>26)</sup>が「身体での模倣が、はっきりと言葉で伝えなくても通じ合い、『共に』を感じながら、かわりを築くための力になっている」と述べているように、身体接触においても同様に言葉でなく身体を接触させることによって「共に」を感じ合うことができると考えられる。

#### Ⅲ.2.8. 【viii 共有した世界感が発展する】

##### 事例B-1 「ドリルパンチ」

5歳児 2019.6.26 場面：自由遊び

BA男とBB男は追いかけ合いを始め、走りながら時々手や身体を軽く接触させる。次第にどちらも興奮し、笑顔で追いかけ合いながら身体を接触させては離れるという行為を続ける。しばらくすると①BA男が笑顔で右腕をぐるぐると回し「ドリルパンチ」と言いながら走ってBB男に近づき叩く。BB男も笑顔でファイティングポーズを取り、さらに向かってくるBA男を弾き返すように両手で押す。BA男は何度も「ドリルパンチ」と言いながら、BB男に向かっていき、BB男も「ヤー」「ハッ」と声を発しながら互いの距離が近づくと両手で押し合う、ということを繰り返す。そのうちに2人は揉み合いながら倒れ、笑い合う。

#### 考察

BA男とBB男の間で始まった追いかけ合いは、次第に興奮が強まり身体が触れ合うようになったことで、身体を接触させる遊びへと展開し、その際に下線部①の強い身体接触が発現している。追いかけ合いが、身体を接触させては離れる、という行為に変化したことによって、遊びの捉え方も「戦う」ことへ変化している。互いに身体が触れ合うことを拒むような言動が見られないことから、2人の間で身体を接触させる行為を遊びに用いることが許容されていると推察できる。遊びが展開している中でBA男が用いた下線部①の強い身体接触は、「ドリルパンチ」という

発声に加えて実際に受け手を強く叩くことによって、戦いとしての遊びを盛り上げて一層楽しもうとしていると捉えられる。その後「ヤー」「ハッ」と言いながら戦いが継続されていることから、下線部①の強い身体接触を用いることによって、共有した戦いの世界観が発展していると捉えられる。言葉やしぐさを用いることでも遊びの世界観を共有することは可能だが、身体を用いることにより行為者と受け手の間にある世界観が、身体を通して一層色濃く共有されると考えられる。

## Ⅳ 総合考察

強い身体接触がもつ8つの意味と、分類された強い身体接触を用いる意味(8)×年齢(3)の $\chi^2$ 検定の結果から、幼児間にみられる他者とのかわりにおいて、以下の強い身体接触がもつ役割が示唆された。

まず「言葉の代替」としての役割である。【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつと捉えられた強い身体接触は、3歳児に有意に多く、5歳児に有意に少ないという結果が示された。3歳児で多く抽出された【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつと捉えられた強い身体接触は、相手の言動によって感情が高揚し、その感情がそのまま強い身体接触として発現する様子が捉えられていた。それは、3歳児の自己調整機能が未発達であることに関連すると考えられる。

鈴木<sup>27)</sup>は幼児の日常場面にみられる自己の欲求や衝動を調整しなければならない場面をエピソードとして抽出し、幼児の自己調整機能について検討しており、3歳児はその時々気分や感情がおもむくままにふるまうため、仲間との間でトラブルが生じたり、集団行動に入ることができなかつたりするなどの様子が見られると述べている。本研究においても、自分がいる場所を他者に譲らないという意思表示として強い身体接触が用いられた場面(事例A-8)が捉えられており、相手に対して一方的に感情をぶつけるような、表しきれない言葉を代替する役割があるといえる。

次に、「自分を表現する」役割である。【vii 同調してノリを合わせる】意味をもつ強い身体接触に着目すると、 $\chi^2$ 検定の結果、3歳児における発現数は、4・5歳児より有意に少ないことが示された。この意味をもつ強い身体接触は、他者を意識して自分を表現し、行為者と受け手が双方向的にかかわるものである。その他にも【v 反応を期待して仕掛ける】【vi 行為自体を楽しむ】などの相手とかかわろうとして用いられる行為には、ふざけやおどけなどの遊戯性を伴わせることで自己を表現しようとする事例が多く抽出されていた。そのため強い身体接触は、相手とかかわろうとして用いられる遊戯的なコミュニケーションとして、自分を表現する役割をもつと考えられる。

最後に「相手と交渉する手段」としての役割である。 $\chi^2$ 検定の結果、5歳児では3、4歳児には抽出されなかつ

た【iv 言葉では表現しきれない考えを補う】意味をもつ強い身体接触が発現するようになり、【i 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつ強い身体接触が、3、4歳児より有意に少ないという結果が示された。

3歳児の事例では自分の思い通りにならないような場面において感情的に強い身体接触を用いる様子が捉えられていたが、5歳児の事例では、相手との関係を考慮しながら自分の考えを表現しようとする姿が捉えられている。

長濱・高井<sup>28)</sup>が5歳児に自他調整の方略が発達すると述べていることから、この時期の幼児は感情を調整して思考的に強い身体接触を用いることで他者に対して自分の考えを伝えようとしていると捉えることができる。事例C-81のように、強い身体接触に遊戯性を伴わせながら自分の考えを受け手に理解してもらおうとするなど、相手と交渉するように意図的に強い身体接触を用いる姿がみられるようになる。このように、強い身体接触には、相手と交渉する手段としての役割があるといえる。

以上のように、強い身体接触は、幼児にとって他者とのかわりにおける役割の一端を担っていることが示された。強い身体接触が他者とのかわりにおいて、ポジティブな影響を与える側面をもつことが示された一方、受け手の受け取り方によってはネガティブに働く可能性があることを見逃すことはできないだろう。強い身体接触によるふざけた行為が行き過ぎたものとなり、相互行為としてのかかわりではなく、特定の幼児に対して一方的に攻撃を続けるようなことがあってはならない。幼児期にもいじめとしての性質をもつ行動が見られる<sup>29)</sup>ことが示されているため、保育者は、僅かではあるが、そのようなかわりに発展する可能性があることを想定しておく必要はあるだろう。また本研究では、強い身体接触を用いる行為者に焦点を当てたため、強い身体接触の受け手については十分に検討していない。そのため、今後は幼児間において用いられる強い身体接触の行為者だけではなく、受け手の反応にも着目し、幼児間において、強い身体接触が相互行為としてどのように用いられているのか、より詳細に検討する必要があるだろう。

#### 引用文献

- 1) ハーロウ (1978) 愛のなりたち (浜田寿美男, 訳). ミネルヴァ書房. 12. 34-41  
(Harlow, H.F. (1971). *LEARNING TO LOVE*. Albion publishing Company)
- 2) ボウルビー, J. (1976) 母子関係の理論 愛着行動 (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子, 訳). 岩崎学術出版社. 235  
(Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss, Vol.1 Attachment*. Hogarth Press)
- 3) 塚崎京子・無藤隆 (2004) 保育現場における3歳児の身体接触の変容. 乳幼児教育学研究. 13. 13-25
- 4) 藤田清澄 (2011) 遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味 - 身体知の視点から -. 保育学研究. 49. 29-39
- 5) 大坊郁夫 (1998) しぐさのコミュニケーション - 人は親しみをどう伝えあうか -. サイエンス社. 47-49

- 6) 牧亮太 (2011) 幼児の遊びにおけるからかひの機能. 保育学研究. 39. 30-40
- 7) 牧亮太 (2009) 幼児のコミュニケーションの様式としてのからかひ - 観察・エピソード分析による多角的検討 -. 乳幼児教育学研究. 18. 31-40
- 8) 牧亮太 (2012) 幼児期におけるからかひの機能に関する研究. 博士論文 広島大学. 広島. 1-2
- 9) 白井博・森田亜希子・山田真由美・岩宗威晴・二宮香・桜井亮 (1994) 2, 3歳児の対人的問題解決行動の発達: いざこざ場面における行動の縦断的分析. 北海道教育大学紀要. 45. 1. 43-55
- 10) 木下芳子・斎藤こずゑ・朝生あけみ (1986) 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達 - 3歳児におけるいざこざの発生と解決 -. 埼玉大学紀要. 35. 1-15
- 11) マジョリー・F・ヴァーガス (1998) 非言語コミュニケーション (石丸正, 訳) 新潮選書. 15
- 12) 飯田和子・石川武・菊本るり子・メアリークリッシュ (2014) はじめてのドラムサークル - 教師と指導者のための実践ガイド -. 音楽之友社. 28-29
- 13) 足立麻衣子・杉山治・神原誠之・萩田紀 (2012) 叩くコミュニケーションを用いたインタラクティブロボット. WISS
- 14) 新井弘和・中村葉々子・竹中晃二・岡浩一郎 (2002) 一過性運動と不安の減少 - 状態不安評価における心理測定的交絡 -. ストレス科学. 16. 241-251
- 15) 白山正人 (1990) スポーツ・運動の心理的効果について - 精神医学の立場から -. 日本体育学会大会号. 41. 25
- 16) 望月崇博 (2016) 小学校体育科「体ほぐし」がもたらす可能性 - コミュニケーションに特化した活動に着目して -. 帝京科学大学教職指導研究1. 131-138
- 17) 小田紘平 (2017) 身体接触を伴う運動が人間関係の構築に及ぼす影響の分析. 京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報. 57-66
- 18) 池田慎之介 (2018) 幼児期から児童期における感情表出の調整の発達. 心理学評論. 61. 2. 169-190
- 19) 内田伸子・津金美智子 (2014) 乳幼児の論理的思考の発達に関する研究: 自発的活動としての遊びを通して論理的思考力が育まれる. 保育科学研究. 5. 131-139
- 20) 松井愛奈・無藤隆・門山睦 (2001) 幼児の仲間との相互作用のきっかけ - 幼稚園における自由遊び場面の検討 - 発達心理学研究. 12. 3. 195-205
- 21) 牧亮太・湯澤正通 (2011) 幼児の遊びにおけるからかひの機能. 保育学研究. 49. 2. 30-40
- 22) 前掲7. 31-40
- 23) 根ヶ山光一・山口創 (2005) 母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達. 小児保健研究. 64. 3. 451-460
- 24) 正木健雄・井上高光・野尻ヒデ (2004) 脳を鍛える「じゃれつき遊び」. 小学館. 12-34
- 25) 千葉洋平 (2013) じゃれつき遊びの効果と特徴に関する研究. 国士舘大学体育研究所報告. 32. 113-117
- 26) 鈴木裕子 (2016) 保育における幼児間の身体による模倣. 風間書房. 8-12. 188
- 27) 鈴木亜由美 (2006) 幼児の日常場面に見られる自己調整機能の発達: エピソードからの考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要. 52. 373-385
- 28) 長濱成未・高井直美 (2011) 物の取り合い場面における幼児の自己調整機能の発達. 発達心理学研究. 22. 3. 251-260
- 29) 畠山美穂・山崎晃 (2003) 幼児の攻撃・拒否の行動と保育者の対応に関する研究: 参与観察を通して得られたいじめの実態. 14. 3. 284-293

(2021年9月24日受理)